

高齢ボランティアのライフストーリー（その1）

A Study on the Life Story of an Aged Volunteer: part1

富川拓

Tomikawa Taku

要 約

本論ではボランティア連絡協議会の構成員に対する量的調査に備えて実施したインタビュー調査の結果を整理し検討することを目的とした。

A市のボランティア連絡協議会元代表のBさんを対象とした調査の結果を整理して「ボランティア活動を始めたきっかけ」「現在までのボランティア活動」「ボランティア活動に対する考え方」「今後の活動」などについて検討した。

Key Words : ライフストーリー, ボランティア, 高齢者

1. 問題の所在

筆者はA市におけるボランティア活動の活性化, 特に高齢ボランティアの活動の活性化に繋がる方策を検討するために, A市の社会福祉協議会内に設置されているボランティア連絡協議会加盟団体の構成員を対象とした調査を計画している。

A市のボランティア連絡協議会は「ボランティア相互の連携によりボランティア活動を広げて行くと共に会員の資質の向上を目指すこと」を目的とする会である。また「研修・交流会」「会報発行」などの活動を目的達成のために行うとしている。会員はA市ボランティアセンターに登録しているサークルである。現在53のサークルで構成されている¹⁾。

本論ではこのボランティア連絡協議会の構成員に対する量的調査に備えて実施したインタビュー調査の結果を整理し検討することを目的としている。

2. 調査の概要

調査対象者はボランティア連絡協議会の元代表であるBさん（女性）である。調査は2007年5月から2008年7月にかけて合計6回実施しており、現在も継続中である。インタビューはBさんがリラックスできる居住地近辺のファミリーレストランやファーストフード店で実施した。ボランティア活動を中心としたBさん自身の半生を語っていただく形をとった。

インタビューは半構造化の形式で実施し、ICレコーダを使用して記録し、その後記録した音声データをスクリプト化した。なお文中の空白の（ ）は聞き取り困難な部分、また（ ）の中の記述は筆者の補足である。

3. 結果と考察

Bさんのライフストーリーは非常に多岐に渡っているが、本論ではボランティア活動と関連する部分の一部を取り上げて考察していく。

2006年まで10年間ボランティア連絡協議会の代表を務めたBさんは昭和11年に鳥取県米子市で生まれた。夫の転勤により現在はC県A市に移り住んでいる。長年手話と国際交流の活動を中心に活動しており、A市のボランティア連絡協議会には手話のサークルを通じて加入したそうである。

3.1 ボランティア活動の原点、幼少期から結婚まで

幼少の頃、Bさんの実家は百姓や養蚕をしていたことから食べ物不足するという感覚を経験したことがなかったようだ。「物があるから与えられる」という感覚を持っていたとも述べている。

「うちは百姓はしてる養蚕はあるとかね、そういうこう、足りないっていうのはあまり感じたことがない。食べ物とかね。だからあればあげるっていう。それが当たり前のことだと思ってたんです。でも近所は貧しくてね、毎日魚をとってきて食べたりとか、それから家へ蚕の繭を手伝ってそれでお金はいらないの。お米とかお味噌とか醤油とか、もらって帰ってたんです。な

んでかなって私思ってたんですけども。家は醤油も味噌もお米もすべて自分のところで作ってましたので、山ほどあったので、どうぞって感じで。今の1時間なんぼじゃなくて。1日働くと、お米何丁かとお味噌ともらえる。普通の家はそんな感じでしたわ。周りね。」

「だからそういうのが当たり前、何もうっとこが沢山ね、あるからどうのこうのじゃなくて。物があるから与えられるって感じ、ない人に。そういうのは自然とこう身についてましたね。」

「らっきょができる頃になると、お友達がいっぱい来るの。そうするとね、なぜ来るかと言うと、らっきょが欲しいの。らっきょもね綺麗なね、揃った粒の綺麗な揃った以外はね、捨てちゃうの。うちは。いらぬから。その捨てたのもらっきょなんですよ。別にね、成分も一緒やしおいしいし。それをもらって行って、子供がですよ。まだ小学校の子がもらって行って、お家でらっきょ作るの。ただやもんそんなん。ちょっとちっさかったりね、ちっさいやつがひんまがったりしたの、農家に出荷できないからね。同級生たちがいつもいっぱい来るのね。」

3.1.1 宗教的背景

Bさんは小さい頃からボランティア活動をしようとしていたわけではなく、実家が天理教を信仰している関係で奉仕活動をしていたと語っている。ボランティア活動の原点には宗教の影響があると考えられる。

「まあね、ボランティアをしようとして小さい時からしたわけではないからね。昔はほら、（ ）が時間と暇と金があればするっちゃうのがボランティアだった頃ね。ボランティアちゃうか奉仕のね精神だったんですけども。私の場合はその、原点はね、(中略)家が天理教なんです。だから、天理教っていうのはね、施すってちゃうことをね、恵まれる、恵まれてる人が恵ま

れない人に施すちゅうのが昔の天理教の方だったんです。そういうのがなれなれになってたから。」

3.1.2 祖父の影響

Bさんの祖父は第2次世界大戦の終戦の数年前まで、およそ18年間アメリカのサンディエゴで花の研究を行い、その販売の企画をしていたそうである。

「家は祖父がアメリカ行ってたでね。アメリカのね、サンディエゴにカーネーションのね、戦争、終戦まで、終戦ちょっと前に帰ってきたんですけども、18年間サンディエゴでカーネーションの研究。日本にもね、今はカーネーション言ってもね、私たちと違って、若い人たちは当然どこでもできるわって思ってるでしょ。何十年も昔にね、昭和の10年代にね」

残念ながらこの事業は成功しなかったようだが、このアメリカ在住の時期にBさんの祖父はキリスト教に出会った。帰国後実家では祖父がキリスト教、祖母が天理教という状況となる。しかし宗教の種類は異なるとはいえ、奉仕の精神は同じだという思いが当時の実家にはあったようだ。

「祖父は外国で教会に行ってたそうです、ずっと、ボランティアで。教会の掃除したり、その自分の研究する傍らね。近くのね、ホーリネス教会って言うてましたわ。（中略）そこへ通ってお掃除してあげたり、そういうのはやってたいう話を子供のころに既に聞いてるんです。そういうのはあったかなあ。宗教的なものがね。家は天理教だけど。祖父はアメリカで18年間、過ごした。まあそれから小学校は記憶ないんですけどね、戦争が終わったぐらいですから、てんてこまいでしたわね。」

「だから、キリスト教と天理教と仏教とがむちゃくちゃなってるわけね、

うちの家では。家は仏教で葬式するし。祖父の考え方はキリスト教的やし、祖母の考え方は天理教だし。家が、家全部が天理教だから。だけど、私と祖父はちょっとその聖書の方に曲がって行ってしまった。」

「教会の牧師さんって貧しかったのそのころ。神学校出てね、東京の。そして食うや食わずで一生懸命、あの人達はね。パンの耳だけ買って食べるとかね。（中略）うちには目の前に大きな畑があるんです。おねぎが欲しかったらおねぎ持ってってって。大根が欲しかったら大根持ってって、お芋が欲しかったら勝手に、牧師さん達に、提供してました、私のとこが。祖母はそのキリスト教大嫌いやけど、でもそれは別やん。施すちゅうことに関しては一緒だから、奉仕のね精神はね、一緒やからどうぞ言うてね。やっとりました。」

このような環境のもと、Bさんは中学1年生で初めて聖書を読み、高校2年生で洗礼を受けることとなる。洗礼後は家庭内での衝突もあったが、YMCAにおいて熱心に活動するようになり、その中で自然とボランティア活動に繋がる勉強をすることができたのではないかと語っている。

「(中学校1年ごろ) その頃に初めて聖書というものを読んだの。近所のおばちゃんが結核でね (中略) 仕事ができないんだって帰ってきて。うちのすぐ裏だったのでね、静養がてら教会に行ってたみたい。たぶん自分が心病んでるから、行ってたんだと思うんですけども。私はまだ10代やから。子供のときやから。1回行ってみないってね言って、聖書渡してくれたの。ホンマの今のあの文庫本のちっちゃいこれぐらいの聖書ね。誰でも、優しく優しく読めるようなね。ホンマの聖書の厚いのじゃなくて。でそれ読んでたら面白いのね。旧約聖書物語が。」

「高校2年生くらいに洗礼受けました。ほんで家族会議があって、天理教の

うちにキリスト教もあるし、そんなんではあかん言うて親戚も集まって、破門じゃあて。破門やて。そんな子供捕まえて10代の子供、言われたんですけども。私はそんなもんどうでもええわっちゅう感じでね。でYMCAに入ったんです。（中略）でそこでいろんな活動があったので、そこで自然とこう勉強するのかなあと。ボランティア的なものをね、（ ）そこでそういうちょっとした基本ができたのかなあと思うんですけども。それがボランティアにつながっていったかなあって感じで。」

なお結婚後は嫁ぎ先の関係で、仏教の影響を受けたとの語りも見られた。

「結婚してからは仏教になったの。（中略）だからB家はね（中略）お嫁に来たときはすんごくお寺とか仏教の強かったです、おばあちゃんが舅さんが。だから、元は天理教、その次にキリスト教が入って来て、その次に結婚してから仏教と言うことで、お寺参りはするようになりました。」

「（仏教でもボランティアに通ずる精神が）あります、あります。だからどっかと言うたら宗教的から入ってるかもしれませんね。精神性というかな。ちょっとわからないですけど。」

3.2 結婚から現在までのボランティア活動

Bさんは結婚後夫の仕事の関係で多くの土地を移り住んできた。鳥取県の米子から兵庫県の西宮を経てC県のD町、そして現在の居住地であるC県のA市へと引っ越しを重ねている。県事務所での仕事もBさんとボランティア活動を結びつけたようである。

「結婚したら転勤族で、あちこち振り回されて（中略）でC県に来て、C県の県事務所。県事務所というたら、県庁の障害福祉課やけど、そこで勤めるようになって（中略）自然とそういう関わりができますよね。」

3.2.1 手話との出会い

昭和50年に新聞記事で手話を知ったのが始まりだそうである。昭和51年にA市で初めて開かれたC県主催の手話講座にとりあえず参加したが、聾啞者の声を聞いて驚いてしまい、帰ろうかと思ったと語っている。しかし10回ほど受講したころには、違和感から興味へと気持ちが変化したそうである。

Aさんはこの講座の終了後、手話のサークル活動を始めている。夜間の活動であったため姑さんが子供の世話をしてくれたと述べている。その後昼間の手話のサークルを立ち上げ、活動を継続し、昭和59年にはC県の事務所に選任手話通訳として勤務することとなった。ここで5年間勤務したが、手話による頸腕症候群になったことや、夫が多忙であること、姑の健康状態の悪化などの理由で退職している。

「(専任の手話通訳を辞めた理由を質問されて) いやいやいやいや。自分が、しんどくて辞めただけ。他のやりたいことがあったから。まだ60(才)までいれたんですよ。県庁の障害福祉課に。もうしんどくなった。主人も忙しい。えらくなったから退職した話だけの話。」

「まあおばあちゃんも悪かったんですけど。」

3.2.2 国際交流ボランティア

また国際交流ボランティアの始まりは西宮での活動であった。土地柄であろうか、領事館関連の国際交流が盛んだったようだ。Bさん自身は当初それらの活動をボランティア活動と捉えていなかったが、それらの活動が徐々に本格的な国際交流のボランティア活動へと繋がってきたと考えられる。

「ボランティアっていうよりもなんとかレディー、有閑マダムばっかしだからそのボランティアっていうよりも、いつも暇で金も余ってる暇もあるって人やから何をしよう、今度はパーティーしようか。領事館で何かそんなことばっかやってるから。」

「(国際交流ボランティアを始めて) もう36年。(中略) 日中友好協会は16年ぐらいかな。」

この語りに出てきた日中友好協会の活動は、語学への興味がきっかけとなり始まったものである。A市が開催した北京語の講座が、Bさんを日中友好協会の活動へと導いたようである。

「私の場合は日中友好協会はね、北京語教室に、はじめ入ったんですよ。(中略) 孫文の記念館に行ったときに言葉が通じなかった。これは田中角栄が日中国交正常化をした次の年です。私は入って行きました。あっちの方から、香港から。そのときにもう不自由したので、困ってるときに市民会館が第1回中国講座を開きます、市が、市がね。開催したんです。先に第1回行ったんです。ついでにもう自然とね日中友好に入ったんですけど。(中略) ちょっと買い物ができるくらいはね、北京語勉強しようかなって。」

3.3 ボランティアに対する考え方と今後の活動

下記の語りに見られるように、ボランティア活動をするにあたり、嫌味を言われた経験もあったようだ。肩書きなどに囚われることなく活動できる現在の社会状況を肯定的に捉えているように見受けられる。

「自然が一番私は好きなんです。(中略) 私は私。どんなえらかろうと、どんな金持ってようと、すりよって行かないってのが私のひとつポイントです。」

「(ボランティアは肩書きが関係ないところがいいですね。) そうです。囚われずね。その目的を持って、するっていうのがね。(中略) 極々普通に皆さんがね、(ボランティア活動を) できるようになったわね。それいいことだと思うんですけど。昔やったらようあんたするねとか、金があるから、

お金に余裕があるからできるだろうってよう言われましたよ。でもはい、私は何もその金があるとかないとかなわなくて、月給とりですって言うてた。月給とり、サラリーマンということやね。サラリーマンでできる範囲内ですますからねって。」

3.3.1 ボランティア活動とは

またBさんにとってボランティア活動とはどのようなものか、という質問に対しては以下のように答えている。

「大層なことと言えば、皆が幸せになればいいんですけど。私はちょっとしたことでもいいんですけど、人の喜ぶ顔が好き。人が喜べば自分も喜べるでしょ。だから、なんて言うの、なんとかを惜しまず、労苦を惜しまずっていうかな。」

3.3.2 今後の活動について

手話と国際交流を柱としてボランティア活動を行っているBさんであるが、その他にもさまざまな活動を行っている。それらの活動の今後については以下のように語っている。

「んでまゝ、最後にボランティア連絡協会の会長を去年までして、(中略)忙しいから副会長さんに譲りました。でもまゝ役員としては残ってますけどね。70も過ぎてほどほどにやんなきゃ。大変だから。」

「70歳。だから70歳過ぎても死ぬまでしたらいいけどボランティアはね。このように代表などの活動は制限し、一人のボランティアとして死ぬまで活動が出来たらいいと考えているようだ。」

「私はいつでもね、民生委員の皆が入ってきたときに言うんですけどね、

なんでもフィフティーフィフティーにしとかないと、死んでまう。死んじゃう。あんまりひとつづつを一生懸命やるとね、命をなくす。私はもう何を言われようが私ができる範囲内しかできないよって。」

4. まとめ

以上、Bさんのボランティア活動を中心としたライフストーリーのごく一部を整理し検討した。Bさんは現在もボランティア活動のみならず、A市におけるさまざまな社会的活動に積極的に参加している。地域におけるボランティア活動の担い手の高齢化が進んでいる昨今、Bさんのような人物を生み出す社会的要因について今後の調査ではさらに詳細に検討していきたい。

注

- 1) サークル数は平成19年度のものである。

付 記

本稿は平成20年度私立大学等経常費補助金特別補助 地域共同研究支援の助成による研究成果である。